

書評 山本淳子 『私が源氏物語を書いたわけ』

紫式部ひとり語り』

呉 羽 長

本書は『源氏物語』の作者紫式部の生涯を、彼女の文集（『紫式部集』）・日記（『紫式部日記』）の詠歌や記事をめぐる数々の独自の解釈により立ち上げたものである。その立ち上げに著者山本氏は、紫式部自身の一人称語りによる回想という形をとり、その方法をもって式部像にリアリティを付与することを得ている。

一人称の語りという形は、小説など虚構作品の手法と見なされがちであるが、本書は山本氏の想像による創作ではなく、紫式部をめぐる歴史資料・日本文学・日本史学の成果をふまえてその生涯の立ち上げがなされている。日本文学の成果の中には、山本氏がこれまでの研究において纏められた『紫式部集論』（平成17年、和泉書院）『紫式部の時代 一条天皇と后たちのものがたり』（平成19年、朝日新聞社）などのほか、一連の『紫式部日記』をめぐる論考のそれがあることはいうまでもない。

本書は、終章を含めて十四章より成る。以下に各章の概要を、その趣意をふまえながら示す。

一 会者定離——雲隠れにし夜半の月

紫式部の娘時代の出来事として、幼馴染みの女友達と年を経て再会し、その後女友達は筑紫に下り式部は越前に下って文通を重ねることがあったが、この友達は筑紫で亡くなってしまふ。この一連の体験を文集により辿って、山本氏は、式部が数々の大切な人との別れの悲しみから目をそらすまいと決めたことで『源氏物語』の作者になり得たとする。

二 矜持——男子にて持たらぬこそ、幸ひなかりけれ

紫式部が漢学の素養を備えていることへの矜持と、一方で女であるためにそれを隠さねばならない引け目を持ち、更にそうした引け目に複雑な思いを添えるものとして、曾祖父兼輔以来の名家でありながら父為時が漢学の家の人として生業をしなければならなくなつたという事情のあることを、系図を辿って示し、式部が抱える家への誇りと没落貴族としての複雑な意識の内実を明らかにする。

三 恋——春は解くるもの

紫式部は越前守となつた父為時に従つて父の任国へ下向するが、本章では為時の除目の際の申文をめぐる経緯、下向と同時期の中関白家の没落の様子を挟みつつ、式部が明るく世慣れた藤原宣孝と恋をし、越前の彼女が都の宣孝と、遙か道を隔てて行つた歌のやりとりの一端を示す。宣孝には他に妻がおり式部は色好みの男と恋をする辛さを知るが、一方で式部の歌「折りて見ば近まさりせよ桃の花思ひぐまなき桜惜しまじ」を白居易「晚桃花」の詩の心を踏まえて詠まれたものとし、そこに式部が宣孝に求める愛の形を読みとる。

四 喪失——「世」と「身」と「心」

結婚生活は、宣孝の死によつて三年で終わる。本章では、宣孝の死後紫式部がしばらく時の感覚を失い、更に「世」という抵抗できぬ現実を知り、無力な現実存在「身」を実感する姿に追隨する。しかし式部はこの後「心」の存在に気づき、それが「身」の現実と寄り添う形のあることにより、式部は精神の自由を得て「心」の世界に生きようとする。そうした式部の思考性がここに提示される。

五 創作——はかなき物語

夫との死別により恐怖に近い心細さの中にあつた紫式部を救つたのが物語の執筆であり、式部の物語は現実以上に現実らしい短編¹¹受領の女と光源氏の恋から始まり、それに源氏を煽らせるため「雨夜の品定め」を置き、それらが帯木三帖になつたとする。このように始まつた物語が、式部自身の生の問題、人の生きる問題を内包し

ながら、長編化して光源氏の一代記『源氏物語』となつたという。
六 出仕——いま九重に思ひ乱るる

藤原道長の彰子後宮のこ入れ策として、彼の妻倫子の要請もあつて、彰子に仕えることになつた紫式部であつたが、出仕当初の同僚女房の冷淡な態度に、里にひきこもらざるをえなかつた。しかし彼女は「おいらか」と自分を見せる「惚け痴れ」の心術により、自らの居場所を確保し、更に小少將の君、大納言の君といった、式部とは別の形で運命に翻弄された同僚と出会い、互いの心の孤独に寄り添うことができるようになったとする。

七 本領發揮——楽府といふ書

彰子中宮の懐妊は、それまで帝が中宮に心を向けずその徴候がないことに見かねた道長の行動¹²御嶽詣でが功を奏した現れという見解を披瀝する。またその頃、紫式部が「日本紀の御局」と噂されたことを聞きつけた中宮に乞われ『白氏文集』『楽府』を進講するようになった経緯について、進講を通して帝の世界を覗きたいと願つた中宮の意向を付度した上、式部がこの進講により、拙い宿世の自分が自分らしい生き方をしていることを実感する姿を捉える。

八 皇子誕生——秋のけはひ入り立つまに

『紫式部日記』寛弘五年初秋から九月の中宮彰子の敦成親王出産までの記事をなぞり、中宮の過酷な人生への紫式部の同情と敬慕を指摘し、一方で出産間近になつて物の怪が靈媒たちに取り憑く姿から、道長に敗れた人たち、特に定子の声を想定する。また、無事男

皇子が誕生したことから、この誕生で撰閣の道を約束された道長の強運を、式部の感想として確認している。

九 違和感——我も浮きたる世を過ぐしつ

彰子中宮が皇子を出産した後、帝の土御門邸行幸を前にしたきらびやかな邸内の様子と裏腹に、紫式部の内に憂鬱と不如意の思いが頭をもたげていることは『紫式部日記』により知られるが、式部は女房生活に違和感を持ちつつも、中宮に仕えて以後内側から変わっていく自分を感じていたという。そのきっかけになったのが内裏の盜賊事件であり、中宮の安危を気遣う式部の行動に、山本氏は、文雅を事として没落貴族の埒内に孤立する父為時や弟惟規と異なる道歩んでいる彼女の姿を見ようとする。

十 女房——ものの飾りにはあらず

『紫式部日記』には、寛弘五年十一月一日、敦成親王五十日の儀の夜、藤原公任が紫式部の居る廂の間を覗き、「あなかしこ、このわたりに若紫やさぶらふ」と声をかける出来事が記される。この記事について、山本氏は式部が格下の文芸物語の作者が正当の文化漢詩文の重鎮を袖にする小気味よさ、更に「若紫」巻での『遊仙窟』引用を公任に認められたことの喜びを感じていた、と想定する。その上で、寛弘六年十一月の敦良親王出産に触れて藤原伊周の死の意味を述べ、そこから、日記に新たになされた書き加えとして、中宮付女房が中宮を支えようとする意識に欠けることについての式部の考えに触れる。それは定子皇后付の女房たちの優秀さを念頭に

したものが、山本氏は、特にその女房たちの姿が清少納言『枕草子』によって作られたものであるとし、同書「雪のいと高う降りたるを」の段の解析から、『日記』中の清少納言評「まだいと足らぬこと多かり」の例をここに見、『枕草子』の虚像性を指摘する。

章の最後で、この日記が宮廷女房心得として娘に宛て書かれたこととの事情を示す。

十一 「御堂関白道長妾」——戸を叩く人

紫式部は『源氏物語』の作者であることで道長から戯れに「好き者」として歌を送られることがあり、またある夜渡殿の局の戸を道長に叩かれ開けなかったことで翌朝難ずる歌が送られてきたことがあつて、式部はそれぞれに場に応じた切り返しをしているが、山本氏は、その対応の妙の所以を明示する。加えて『紫式部日記』中の道長との「女郎花」の歌の応酬を掲げ、その贈答が家集に載せられた形から、式部の「道長妾」とも読める二人の関係性を暗示する。関連して、宮廷女房が主家の殿方と召人の関係になった例を紹介し、そうした召人が『源氏物語』中にも登場して、個々に与えられた「身」（境遇）を生きている点を指摘する。

十二 汚点——しるき日かげをあはれとぞ見し

『紫式部日記』寛弘五年十一月豊明節会の五節の舞の折、中宮付女房たちの間で藤原実成の五節の局にいた左京の馬という女房に対するいじめの相談がまとまり、嫌がらせの贈り物に添えて意地悪な挨拶歌を紫式部が作るようになったが、その左京の馬を揶揄する歌

の返しが実成の父の内大臣公季を経て道長方に渡されることがあった。式部はこれを汚点としており、やり取りされた歌の含意の詳細な解説をもって、事件の推移に沿っての式部の内面が辿られる。

一方で寛弘七年敦良親王五十日の祝いの折のこと、宮の御膳を受け取る役にあつた伊勢大輔・源式部の、袖口の色合わせの悪さに宰相の君が口惜しがるがあつたが、それに対して式部は根拠を持つて反駁し、女房の心得を書き添えている。

十三 崩御と客死——なほこのたびは生かむとぞ思ふ

寛弘八年の一条天皇の崩御、及び紫式部の弟惟規の逝去という出来事をめぐり、式部にとつてのそれぞれの意味を明らかにする。

まず、帝の崩御は道長の摂関体制を実現するものであり、道長は権勢ばかりが目に入って帝の讓位を中宮に知らせることを怠ることがあつた。中宮はそこに道長の「隔て心」を見たことで、新たに自らの考えによって言葉を発する意志を持ち、逞しい国母への道を踏み出したという。また式部は諒闇の中で、帝の崩御をめぐる一連の出来事を『源氏物語』の中の記事と重ねていたことを指摘する。

惟規は従五位下を叙された後に職を辞して為時の任地の越後に下り客死したが、山本氏は、彼の紅葉を愛で虫を愛おしみつつなお生きることに執する死に様を式部が「見事」と評価したとし、そこに他の唐突に死を迎えた人々と同様な悲しみを見、更に『源氏物語』最後のヒロイン浮舟の「ちっげな」存在の「愚かな心」と重ねる。

終章 到達——憂しと見つとも永らふるかな

一条天皇崩御後に彰子皇太后が同帝の時代を彷彿とさせる象徴として理を通す生き方を貫き、紫式部がその皇太后と藤原実資との間の取り次ぎの役割をもって女房の務めを果たしたことを述べ、その後里下がりした式部について、詠歌を読み解きながら晩年の心境を明らかにする。死を予感した式部が少少將の形見の文に感慨を催しつつ、自分の家集を作ろうと決意するまでの心の動きを辿る。

最後に、ある年の初雪の日に受け取った歌への式部の返歌を掲げ、憂いばかりの我が人生を顧みる姿をもって式部の最後の像とする。

以上十四の章をもって山本氏は紫式部の生涯を紡ぎ上げている。読み通して、二(章)で示された、没落して漢字の家となつた人の娘という境遇が式部に大きく影響を及ぼしている点が印象強く感じられた。その複雑な意識が生涯を貫き、彰子後宮出仕後も「一」という漢字も書かぬ偽装をしつつ彰子に新楽府進講をする際に、彼女の心を律していたことが知られる。

式部の時々の生の局面や『源氏物語』の記述の背後に透かし見える漢字の世界の指摘も、そうした意識の存在を前提にしたものである。例を挙げれば、三(章)で、式部が宣孝に送つた歌に白居易「晚桃歌」の影響を見ること、十(章)では敦成親王五十日の夜の藤原公任の語りかけにより彼が「若紫」巻に『遊仙窟』の影響を読み取つたことを知つてひそかに喜ぶ式部の思いを想定することなど、日記・家集、『源氏物語』が、漢籍をふまえて作られている点を、新見

として引用原典の記述を紹介しながら示す。

そうした漢学の家の娘として生きる紫式部が、生涯に様々の別れを体験し、宮仕えにおいて身の程を痛感する。本書ではそうした生涯の転機となった出来事を家集・日記の記事により辿っている。特に注目したいのは、背景となる歴史的政治的事実と丹念に照応させ、彼女の心を剔抉しつつ、家集・日記を独自に解釈して人生のドラマを跡づける場所である。独自の解釈として、まず四(章)で、式部が夫宣孝の死から世と自己の身・心を見つめ気力をもち直していく姿が辿られる点が挙げられるが、そこでの彼女の詠歌、

数ならぬ心に身をば任せねど身に従ふは心なりけり

心だにいかなる身にか適ふらむ思ひ知れども思ひ知られず
について、「心とは現実には縛られないものなのだ」「私にはこんな自由な部分があった」(以上71頁)「私は身ではなく心で生きようと思った」(72頁)という意を読み取り、新しく物語の世界に自らの生の可能性を見出す契機を見たとする。なお「心だに」の歌で「思ひ知れども思ひ知られず」を「私の心は自由なのだ」と訳すことについては、精神の自由を得て「心」の世界に生きようとする式部の思考性を読み取ることはできず、身に従おうとしても従いきれない心のやるせなさを読むに留めておくべきであろう。

他に、人生のドラマの跡づけとして、六(章)で紫式部が宮廷女房として疎外の中から自分の生きるあり方を発見することになった経緯も挙げられよう。つまり当初宮仕えに疎外感を抱いた式部が、同

僚女房の彼女に対する評を聞いたこと、更にか弱い小少将の君との仲らいを契機に、女房として生きる方法を獲得したとする。その際に引きこもる式部が詠み送った歌に対し同僚女房が詠み返した歌「深山べの花吹き紛ふ谷風に結びし水も解けざらめやは」について、「私ではなく中宮様にお願いなさいな」と訳し、同僚女房たちの冷淡を読む(98頁)が、竹内美千代氏「紫式部集評釈」や新潮日本古典集成「紫式部日記紫式部集」などのように、むしろ同僚が式部に向けて「あなたが温かい態度を示せば私がうち解けないことはありません」と、式部に温かい心を求めた意を読むべきと考える。

終章で家集末尾の歌を掲げ、それらが死を予感した最晩年の心境を読み込んだものとするが、「降ればかく」の歌が贈答の返歌であるという事情も含め、それらの歌が死を間際にした詠とすることに躊躇されるものがある点、指摘しておきたい。

紫式部の事績を歴史的政治的事実と丹念に照応させる点も本書の特徴的方法の一つである。中関白家と道長の確執の経緯や一条帝崩御の折の道長の行動に対する彰子の決意などにも詳細な解説を行い、式部が一人称の語りをもってその歴史的事跡を逐一自身と関わらせ、政治に対し自覚的な人間像を浮き彫りにする。

敷衍すれば、七(章)「新樂府進講」で彰子が漢文を読みたいと思った理由を、一条帝の世界に近づきたいと願った点に求め、その思いを知った式部が「新樂府」を選んだとする推測を披露している。この点も一条帝の政治理念と関わることであり、政治的思考性をも

つ式部の姿を特徴づける指摘であろう。

右の方法により紫式部の人生史を辿る中で、本書は式部の事跡と『源氏物語』の記述との関連を多く指摘する。本書の題を「私が源氏物語を書いたわけ」とするゆえんであるが、その指摘は、概して式部の現実体験がいかに物語の各場面に素材的に拘われ生かされているかという点に見られ、彼女の体験が『物語』に内在化しその世界を推し進めていくという観点におけるそれではない点、やや物足りなさが否めない。「書いたわけ」とは「書きおこしたわけ」であるばかりでなく、「書きつぎ」「書き続けて物語を閉じるまでに至ったわけ」をさす。その「わけ」を、作品世界の論理と式部の生の軌跡の纏絡の中で明らかにしなければならないのではないか。

「書いたわけ」に関する山本氏の見解の示される箇所は、五(章)の帯木三帖の雨夜の品定めと空蟬の登場の件りである。氏は『源氏物語』が短篇から始まるとして、式部が女の物語として帯木三帖を最初に書き、光源氏の一生を辿る長編を書きついでいったとする。本書巻末参考文献を見ると、斎藤正昭氏『紫式部伝』(笠間書院)の書名があり、右の執筆過程は、同書に見える帯木三帖起筆説を踏まえた見解と判断できる。ただし斎藤氏の見解は、成立論の嚆矢ともいえる阿部(青柳)秋生氏の指摘(源氏物語の執筆の順序——若紫の巻前後の諸帖に就いて)『国語と国文学』昭和14・8)や武田宗俊氏の指摘(源氏物語の最初の形態)『文学』昭和25・7)にある。「若紫グループ」(阿部氏論、武田氏論では「紫上系」)の人物は「帯

木グループ」(阿部氏論、武田氏論では「玉鬘系」)に現れるが逆に「帯木グループ」の人物は「若紫グループ」に現れない、という事実を顧慮せぬところで、和辻哲郎氏の所説(『源氏物語』について)『思想』大正11・12)などにより「桐壺」巻が「帯木」巻に直結せぬことから、「帯木」巻起筆を提起するもので、光源氏と藤壺など上の品の恋を先行的に考える見解に逆行するものである。

斎藤氏は帯木三帖始発を述べつつ、始発を同三帖に限定することには一考を要するとして、「五十四帖に先行した光源氏の物語があったかと思われる痕跡が残されている」とする(10(章))。また「帯木」巻起筆を論ずる和辻氏は「源氏物語」を想定し、玉上琢弥氏は「帯木」巻の前に欠巻「輝く日の宮」を想定する(「源語成立攷」、『国語国文』昭和15・4)が、山本氏の場合そうした現行物語以前の形態に配慮を行わず、帯木三帖の後「桐壺」巻が書かれたとすると止まる。そうした成立過程説の上に立って空蟬の姿を辿り、その恵まれない境遇に発する女の悲しみの物語を始発に『源氏物語』が作られたと主張するものである。「身の程」を自覚する女の悲しみを描き出すことが物語起筆の目的であったとすることになるが、五(章)の趣意が、夫宣孝を失い寡婦として生きる紫式部の孤独を物語執筆が救ったという点にあることから考えて、そうした孤独を慰めることが、身の程に苦吟する女の悲しみを描くことによって可能であるのか。式部の悲しみからの立ち出でを可能にした物語の内実について考慮すべきではないか。空蟬の心を解析すると、彼女にはそ

の不遇感を根底としつつも、自らの境遇に囚われながら抱懐するロマンへの感慨が読みとれる。そうした感慨を、上の品の女性との恋と別次元に、中の品の女性として光源氏との恋を体験することで求められたという見解について思い及ぶことがあってよいと思う。

青年光源氏の物語は自律性を強めながら中期・晩年期へと進み、薫の物語へと続く。十一(章)末尾で、山本氏は紫式部の思いとして「私はなんと様々の境遇の女たちを見てきたことだろうか。下流から上流の際にまで至る貴族の娘たち、また妻たち、そして女房たち。皆の顔が脳裏に浮かぶ。誰もが「世」を負い「身」を生きていた。そして当然のこと、誰にも心があつた。私はそんな女たちの心を、せめて私の『源氏の物語』の中では言葉と声にして響かせたい、そう思つたのだ。」(190頁)と書く。これが山本氏の捉える『源氏物語』創作の最終的意図のようである。浮舟の最後の姿もこうした物語観の中に取り込まれるものと読める。脇役もヒロインも合わせて様々の女たちの境遇を描くことがこの物語を書く目的だったとすれば、それぞれの女たち、そして男たちの関係性によって一回的に作られる物語の構造体というものをどう意味づけるのか。

物語が自律的に展開する中で作者の精神・人間観も深化を促される。そうした点から「書いたわけ」を説明することはできないか。そのためには、『紫式部日記』執筆時の式部特有の心境が『源氏物語』を書き進める意識とどう関連性を持つのかを明示することが求められるところである。具体的に、『日記』中で前述公任に対して

「かの上はまいていかでものし給はん」と思つて黙止する式部の姿勢や、式部の里居の折の「ころみに物語をとりてみれど見しやうにも思はず」という述懐(以上、十(章))について、『源氏物語』を一回的に書き続けてきた式部において発せられたものであるという見方であらためてその意味を問ひ直す余地がある。

なお、成立した『源氏物語』について、中宮と帝の仲を取りもつという役割を負つていたという指摘がある(十(章))が、この物語の宮廷における意義の一つとして注目される点、付言しておく。

以上、本書は、『源氏物語』の作者紫式部が同時代の政治的情勢を自覚的に受け止め、漢学の家の娘としての複雑な内面を抱えつつ、娘時代・夫婦生活・寡婦時代を生き、宮廷女房としての役割を独自の心術をもつて勤めて晩年に至つた姿を、時々の『源氏物語』に寄せる思いを挿みつつ、彼女の内奥に迫つて描き出したものである。

『源氏物語』世界の進展と纏絡する紫式部の意識について著者の考えを猶知りたいところがあるが、式部という人間を政治的視野をもつ人として位置づけ、引歌・引詩に目配りをして創作に関わる彼女の感性を明らかにし、日記・家集の記述について著者ならではの創意ある解を示すなど、数々の注目すべき内容をもつ労作といえる。一般読者に向けての好著であるとともに、学界に寄与するところの多い著書であると考えらる。

(平成二十三年十月角川学芸出版刊 B6判二五五頁、一四七〇円)